

大学生の世界観・人間観・自己観と幸福感

松 井 洋*

Concepts of the World, People, Self and Sense of Well-being in University Students

Hiroshi MATSUI

要 旨

本研究の目的は、大学生の不適応の問題やそれにつながる傾向の原因として、性格や価値観などの本人の個人特性ではなく、また、就職率、進学率、所得などの環境要因そのものでもなく、主観的な環境認知、すなわち、社会をどう見るか、人々をどう見るか、自分をどう見るかという世界観、人間観、自己観を取り上げて検討する。また、適応ということを経験という主観的な状態にとらえ、世界観などとの関係について分析する。

このため大学生160名の対象者に調査を行った。調査内容は世界観・人間観・自己観についての現状認識、これに関わる事象の起こる確率認識、幸福感と幸福において必要だと考えること・幸福価値観、そして大学適応の項目である。

結果から、大学生の世界観は、自分の生きる世界が、「可能性はあるが温かくはない」、「まじめにやっていたら幸せになれるとはかぎらない」など楽観的ではない、また、自己観も「自己の将来はあまり明るくない」という否定的なものである。このような世界に対する主観的理解は、あまり助け合わず、あまり努力せずということが適応的だという判断につながり、そして、そのようにふるまい、結果として、孤独、無気力という状況が生じていくのではないかと考えられる。

また、幸福感が強い群は世界観や人間観がポジティブである。そして、幸福感につながる価値観は優越や達成など自己内で完結するものでなく、他者との関係に依存するものであった。このように、世界や人々をどう見るかということが幸福感と関係が深いという結果であった。

大学生生活満足は低くはなかった。また、大学生生活満足感も世界観と関係があり、世界観で大学適応もかなり説明できる。

以上のことから、大学生における適応の問題は、性格や価値観のような個人特性だけではなく、世界観・人間観・自己観のような、自分の生きる世界をどう見るのかという認識に影響されるという仮説は検証されたと考える。

キーワード：世界観、人間観、自己観、幸福感、大学適応

*教授 社会心理学

問題と目的

今日、大学生の適応上の問題が少なくないことは松井他（2010, 2011, 2012, 2013 他）でも明らかである。またそれは、学生相談の件数の増加等からもうかがえることであり、その問題の内容は、「友達との関係」、「孤立している」など対人関係に関わる問題が多い。また、「勉強をする意欲がない」、「学校に来たくない」など勉学意欲などの動機や無気力の問題が多くみられる。そして、そのような問題の結果として、不登校、引きこもりなどの問題も生じている。これらの問題につながる原因は、「がまん」や「向上心」や「対人スキル」など、価値観や性格などの個人変数で説明されることが多いし、不適応の原因の一つはこのような個人要因であることは明らかである。

このような問題行動の原因を個人要因に求めることは非行や犯罪の原因説明でも同じである。著者らは、1980年代に非行の急増と「遊び型」などと言われるような非行の内容や動機の変化を目にして、青少年の問題についての研究を始めた。ここでも問題は、青少年の問題についての個人変数の研究であった。この一連の研究の基本的な考え方は、非行や犯罪のような反社会的行動、引きこもりや不登校のような非社会的行動の問題を、当該青少年だけの問題とは考えずに、日本の青少年全体の生き方や考え方の問題と考えたということである。つまり、これらの諸問題は根深い問題の上にあられた氷山の一角ということであり、問題行動とは関係がないように見える日本の青少年の多くに共通する我が国社会に広がる問題と考えた。そこで、日本の青少年の生き方や考え方の問題について俯瞰するために、複数の問題点・要因について、国際比較研究、世代間の比較研究を行ってきた（松井2000, 2005, 2006, 松井他2004, 中里・松井他1992, 1993, 1997, 1999, 2003, 2007 島田・中里・松井1994, 1995）。そして、問題を抑止する要因としては、道徳性（松井2003）、価値観（松井1999, 2008, 堀内, 中里, 松井2004）、愛他性（松井他1991, 1995, 1997, 1998）親子関係（松井2000, 2001, 2002）、そして、恥意識を取り上げている（堀内2004, 2005, 2008, 松井1991, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 松井他1995, 1998, 2004, 2005, 2006, 2008 永房他2004, 中村他2004, 2008, 中里他1992, 1993, 1996, 1997, 1999, 2003, 2007）。

他方、現代の日本の若者の問題は、非行や犯罪のような反社会的行動より、引きこもりや不登校のような非社会的行動が顕著になってきた。そして、このような非社会的問題行動の背後にも、前に非行について述べたように、当該若者だけではなく日本の若者の多くに生き方や考え方の偏向があるのではないかと考えられる。このような観点から、近年は中・高生ばかりではなく大学生の適応の問題についても検討している。たとえば、大学生の不適応に影響する要

因として、授業理解、友人関係、入学目的などについてその組み合わせ効果などを指摘している（松井他（1991）松井・中村・田中（2010）中村・松井・田中（2011）松井・田中・中村（2012）松井（2013））。

以上のように青年の反社会的傾向や非社会的傾向を個人要因で説明するという研究がおこなわれてきた。しかし、個人の特質だけ注目するのでは、これらの不適応の、時代による質的变化を充分には説明できないという問題がある。つまり、大学生の不適応は、大学生であるという社会的地位や、青年期であるという発達段階では説明や一般化できない要素を含んでいる。また、過度に個人的原因を強調することは基本的帰属錯誤と言い得る誤った説明につながる。したがって、問題傾向の原因として社会的要因に注目する必要があるのではないか。つまり、無気力や引きこもりのような若者の問題は、彼らを取りまく世界、彼らが生きている社会の問題であるという視点もまた重要であるということである。若者の問題は社会や時代の反映であるということであるが、これは経済学的、政治学的事実の直接の反映、社会状況の直接的影響ではなく、彼らが社会や人をどのように認識しているかという主観的認識の問題であると考えている。

このような観点に基づく山岸（2008）のモデルでは、個人の行動傾向を規定するのは、個人の選好ではなく社会や周りの人々についての信念である。たとえば、日本人は集団主義的だとよく言われるが、必ずしもそうではない。日本人の個々の特性としてはむしろ個人主義的ではあるが、他方、日本人は「周りの人々は集団主義的に行動するだろう」、「この社会では人は集団主義的に行動することが正しいとされるだろう」という認識・信念（人間観・世界観・自己観）を持っている。そうすると、この社会では自分も集団主義的にふるまうことが適応的だと感じるようになる。そして、あたかも集団主義的心性を持っているがごとくふるまうことになる。このことを大学生にみられる問題傾向に当てはめてみると、大学生はもともとは無気力ではなく意欲を持っているのだが、「この社会では積極的に行動しても良いことはない」、「努力が報われることは少ない」など、彼らの社会や周りの人々に対する信念は否定的である。そのため意欲や好奇心を持ちながら、それを発揮しないことがこの世界での自分の生き方だと考えてしまう。また、「人にアプローチしても人は冷たいものだ」、「人に親切にしても親切は帰ってこない」、「人は孤独であるものだ」、「自分は人から受け入れられていない」という信念が対人行動を躊躇させ、あたかも人嫌いであるかのような生き方をさせることになる。このように、対人的な諸問題にも無気力の問題にもその基盤となる問題として世界観や人間観の歪みという問題があり、性格などの個人特性だけではなく、世界、人、自己の認識の歪みこそが問題にされるべきと考えられる。

本研究の目的は、大学生の不適応の問題や、それにつながる傾向の原因として、本人の個人

特性ではなく、また、就職率、進学率、所得などの環境要因そのものでもなく、社会をどう見るか、人々をどう見るか、自分をどう見るかという世界観、人間観、自己観を取り上げて検討する。また、適応ということを幸福感という主観的な状態にとらえる。

方法

1. 調査対象者

調査対象者は、東京都内、近郊大学生 160 名（女子 138 名、男子 22 名）。

2. 実施時期

2013 年 7 月。

3. 調査項目

調査内容は、世界観、人間観、自己観が中心である。まず、自分の生きる社会の現状とこうあるべきという理想についての項目各 11 項目で 6 件法で回答させた。また、世界観・人間観について自分の生きる社会や周りの人々についてどのくらいの確率でそのことが起こると思うか 0～100%の尺度上にマークさせた。幸福感について、幸福に感じているのか、幸福に必要なことは何か、そして大学適応について 6 件法で答えさせた。質問項目は全体で 92 項目である（巻末附表）。

結果

1. 世界観・人間観

「あなたの暮らしている社会の現状」について「全くあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 6 段階で評定させた。

結果は図 1 のとおり、あてはまるという傾向が圧倒的に強いのは「将来に希望や夢を持てる社会」である。次いで、「物質的に豊かな社会」、そして「自由でのびのびとした社会」、「いろいろなチャンスがある社会」である。他方、あてはまらないという評定が最も多いのは「努力した人が報われる社会」であり、図のように 80%は否定的である。次いで否定的なのは「弱いものでも生きていきやすい社会」、「お互いに助け合う社会」である。

将来に希望があり、豊かで、自由でチャンスはある社会だが、一方では努力は報われず弱い者には生きにくく、助け合いもしない社会という認識の傾向である。つまり、可能性はあるが温かくない社会ということである。

大学生の世界観・人間観・自己観と幸福感

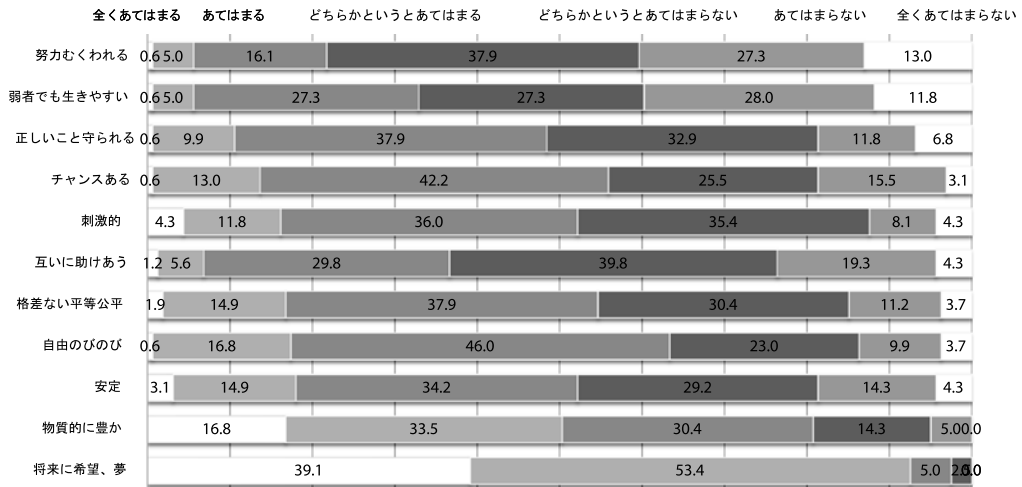


図1 世界観・人間観

世界観・人間観・自己観について、「その社会では、その人々はそのことをどの程度の確率で行うのか」0%から100%の尺度を提示して考える確率にマークさせた。

自分が生きている社会についての世界観は図2のとおりで、「今20歳が30年後ホームレスになると思う」確率は高くはないが「社会の安全」や、「普通の日本人が幸せ」という安心感も半々であり高くはない。

人間観は「おばあさんに席を譲る」人や、「拾った財布を届ける」人は過半数以上だという信頼感はあるが、「いじめを止める」人は少ないと評定する。

自己観は「自分の夢かなう」は40%以下であり、将来家族を持ったり子を持ったりは半数であり、自己の将来は明るくないと認識する傾向がある。

2. 男女差

上記の世界観・人間観・自己観についての男女差は図3のように4項目で有意な違いがあった。女性は男性に比べて、自分の生きている社会の人は、「間違えた釣を返し」、「いじめを止め」、「利己的でない」というように、ポジティブな人間観と、自己観でも将来の幸せについてポジティブな傾向がある。

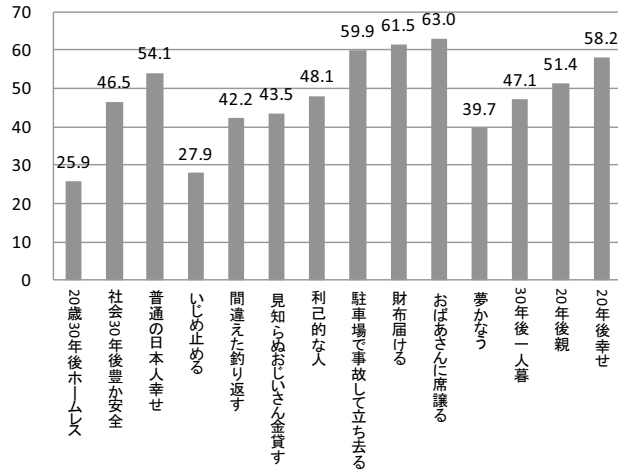


図2 世界観・人間観・自己観・主観の確率%

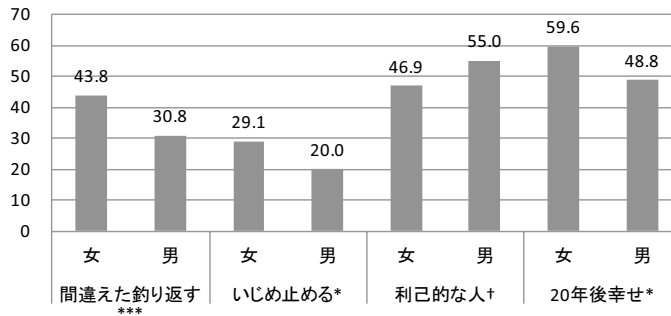


図3 世界観・人間観の男女差%

3. 幸福感

1) 幸福感の強弱

幸福感に関する質問項目のうち最も直接的な「幸せだと思う」について、あてはまるが39.1%、どちらかといえばあてはまるが53.4%、どちらかというにあてはまらないが5.0%、あてはまらないが2.5%であった。このように大多数の対象者は幸せだと答える傾向がある。

本研究では対象者の適応について「幸福感」を基に検討することが目的である。上記の「幸せだと思う」という直接的な問では幸せだという方向に対象者が偏るので、幸福感に関わる7項目を基に合成変数を算出した。因子分析の結果（詳細は略す）、「幸せだと思う」、「毎日の生活に満足している」、「毎日楽しい」の3項目が同一因子になり $\alpha = .862$ と信頼性係数も良好であるのでこの3項目の合計を算出し、中央の約3分の1をはずして、幸福感の強弱の2群を作っ

た。強は 55 人、弱は 40 人である。

2) 幸福感と世界観・人間観・自己観

幸福感の強弱 2 群別に世界化案・人間観の各項目の平均値を図 4 に示す。図のように、「将来に希望」「互いに助けあう」「自由」「格差ない」「努力」「チャンス」「正しいこと守られる」など、幸福感が強い群は弱い群より有意に世界観や人間観がポジティブな項目が多い。しかし、社会が「物質的に豊か」か、「安定している」ということは幸福感の強弱と関係がない。幸福感の強弱と世界観・人間観に関することの主観的確率は図 5 のとおりで、幸福感が強い群は

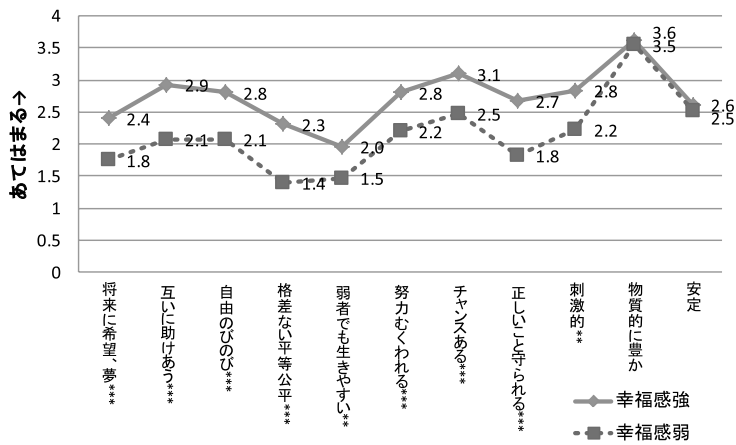


図 4 幸福感の強弱と世界観・人間観

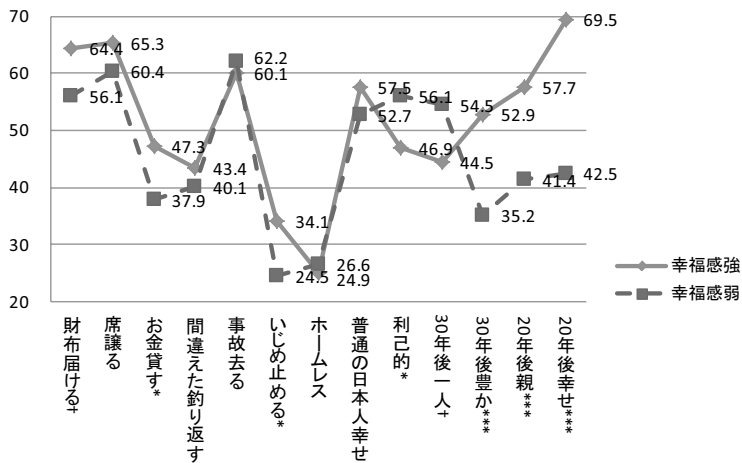


図 5 幸福感の強弱と世界観・人間観 主観的確率

表1 幸福感の高低の判別分析。正純判別関数係数

格差ない平等公平な社会	-.589
チャンスがある社会	-.324
刺激的なことが多い社会	-.423
安定した社会	.556
社会 30 年後豊か	.299
自分 20 年後幸せ	.680

交差確認済みのケースのうち 81.1%が正しく分類。「格差ない…」「チャンスが…」「刺激的…」は値はマイナスだが内容的には肯定的。

「20 年後も幸せである」と感じると同時に、「20 年後に親になっている」確率が高く、「30 年後に一人である」とは思わない。このように幸福感は家庭に恵まれるだろうということと関係がある。さらに、「利己的な人が少ない」、「いじめ止める人は多い」など人間観も良好である。

同様のことを幸福感の高低を従属変数とした判別分析で検討した結果が表 1 である。表のように幸福感は「自分が 20 年後も幸せである」という将来の見通しだけではなく、「社会が格差がなく平等公平である」、「安定している」というような社会観で説明できる。

3) 幸福感の強弱と幸福価値観

「幸福とは何か」ということについては当然個人差がある。この個人差を分析するために「幸福にとって何がどのくらい重要か」という質問をした。項目は表 2 の因子分析結果のとおりである。幸福感についての価値観を項目別に見てみると図 7 のとおりになる。幸福の価値観について対象者が重要と言うのは「愛する人がいる」、「人から愛される」など愛に関すること、「周りに人とうまく・・・」「周りの人から好かれる」など対人関係である。自己に関わることは対人的な事柄ほどは重要でないようだが、「前向き」「自分に自信」などは重要とされる。一方、「人より優れる」「注目」「尊敬」「達成」など優越や達成については幸福にとって重要ではないとされる。

以上の項目を整理するために幸福価値観の項目を因子分析した。因子分析は最尤法、プロマックス回転である。因子分析の結果は幸福感の価値観は 6 因子の単純構造になる。それぞれの因子は表のように名づけられた。

この 6 因子の因子得点を幸福感の強弱 2 群別に平均値を見ると図 8 のとおりである。図のように、幸福感が強い群が達成、前向き、尊敬などの「前向き」の因子、愛される、愛する人などの「愛」の因子で有意に、興奮の因子で有意な傾向があり、ポジティブな態度であった。

表2 幸福価値観の因子分析

	因子					
	1 愛	2 優越	3 興奮	4 周囲	5 前向き	6 正義
人から愛される	1.035					
愛する人がいる	.625					
人より優れる		.697				
人から注目される		.662				
刺激的なこと多い		.341				
落ち着いた気分		-.324				
気分がうきうきすること			.869			
ドキドキわくわく気分			.504			
周りの人とうまく				.692		
経済的に豊か				.549		
周りの人から好かれる		.446		.526		
人並であること				.304		
困難目標を達成					.631	
前向であること					.563	
尊敬される					.320	
正しいことをしている						.753
自分に自信						.437
社会の役に立つ						.405
固有値	4.831	1.720	1.609	1.371	1.282	.924
分散の%	15.612	14.176	6.833	5.015	4.640	2.710
因子間相関						
第2因子	.261					
第3因子	.202	.265				
第4因子	.520	.311	.235			
第5因子	.334	.308	.311	.225		
第6因子	.404	.412	.036	.422	.441	

6 因子で幸福感の強弱の判別分析を行うと表3のように分類率は高くないが図8と同様の傾向がみられ、「前向き」の因子の係数が大きい。つまり、前向きな態度が重要と思うほうが幸福感を持ちやすい。

4. 大学適応

本研究では幸福感を従属変数とした分析を行ってきたが、本研究は「大学生の」適応ということがテーマなので、大学生の大学における適応を従属変数とした分析を行う。従属変数としては大学適応全般を反映していると思われる「大学生生活に満足している」の項目を用いた。こ

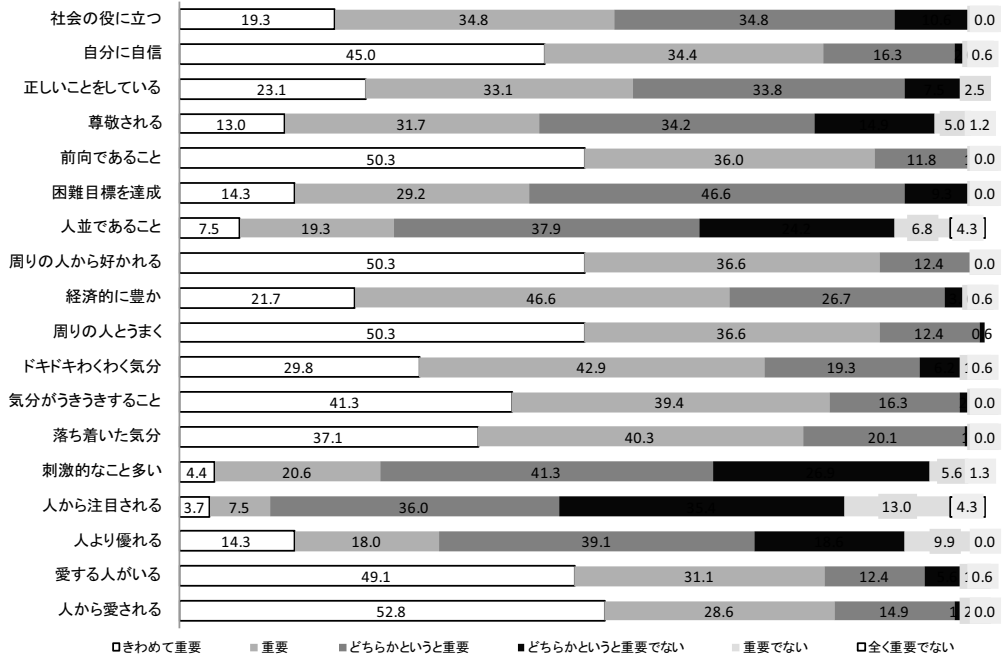


図7 幸福感の価値観

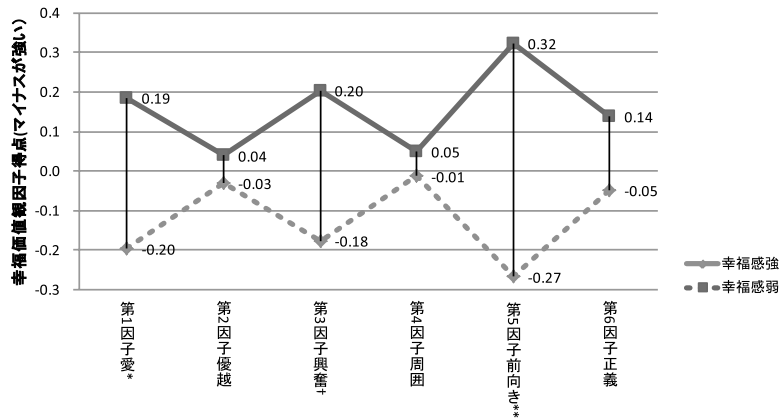


図8 幸福感の強弱と幸福価値観の因子別得点の関係

大学生の世界観・人間観・自己観と幸福感

表3 幸福感の幸福価値観による判別分析
標準化された正準判別関数係数

第1因子愛	.261
第3因子興奮	.220
第5因子前向き	.782

交差確認済みのケースの64.5%が正しく分類。

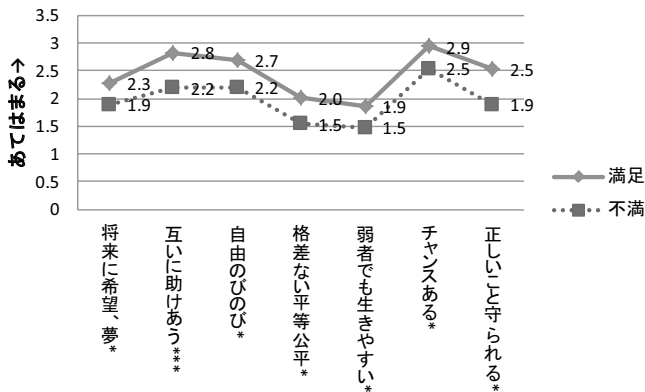


図9 大学満足・不満と世界観・人間観

の質問に対しては「あてはまる」22.4%、「どちらかというにあてはまる」47.8%、「どちらかというにあてはまらない」23.0%、「あてはまらない」6.8%であり、満足傾向が強いが、この4件法の中央で大学満足群と不満群に分類した。各々113名、48名である。

この2群によって世界観・人間観の各項目の平均値を比べたのが図9である。図のように「正しいことが守られる」、「互いに助け合う」、「格差ない・・」、「自由のびのび・・」、将来に夢希望、「チャンスある」などの社会観に有意な差があり、大学生生活満足群は不満群に比べて世界観がポジティブである。

同様に大学生生活満足・不満と世界観・人間観・自己観の主観的確率の関係をみると、図10のように「夢かなう」、「30年後豊か」、「20年後親」、「20年後幸せ」といった自己観について大学生生活満足がポジティブである。また、世界観・人間観についても人々は「利己的」、「いじめ止める」などについてポジティブである。

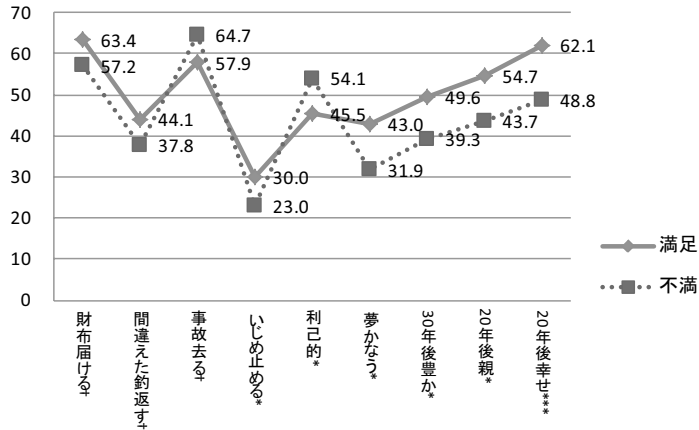


図10 大学満足・不満と世界観・人間観 主観的確率%

表4 大学生生活満足・不満の世界観・人間観・自己観による判別分析 標準化された正準判別関数係数

20歳30年後ホームレス	.319
自分20年後幸せ	.592
互いに助け合う社会	-.373
正しいこと守られる社会	-.479
物質的に豊かな社会	.403

交差確認済みのケースのうち70.8%が正しく分類。「互いに…」と「正しいこと…」は得点が-の場合肯定的。「物理的に…」は+だが内容的には否定的。

大学生生活満足・不満の2群を以上の世界観・人間観・自己観で判別した結果が表4である。「自分は20年後に幸せ」という自己観の係数が大きい、「正しいこと守られる社会」、「互いに助け合う社会」、「物質的に豊かな社会」(-)という世界観も大学生生活満足感を説明する。

考察

大学生の適応の問題は従来、彼らの価値観や態度、性格などの個人的要因で説明されることが多かった。しかし、環境要因の影響、ただし環境そのものが個人に影響するのではなく、世界観や人間観や自己観など、彼らが自分の生きる世界をどのように認知しているのか、言わば主観的環境によって適応、不適応は影響されるのではないかという仮説をたてた。これを基に

大学生 160 人を対象に調査を行った。

世界観や人間観について、「あなたの暮らしている社会の現状」評定させた結果は、あてはまるという傾向が強いのは「将来に希望や夢を持てる社会」、「物質的に豊かな社会」、「自由でのびのびとした社会」、「いろいろなチャンスがある社会」であり、あてはまらないという評定が多いのは「努力した人が報われる社会」、「弱いものでも生きていきやすい社会」、「お互いに助け合う社会」である。将来に希望があり、豊かで、自由でチャンスはあるが、努力は報われず弱い者には生きにくく、助け合いもしない社会という認識の傾向である。つまり、大学生は自分の生きる世界が、可能性はあるが温かくはない社会と認識している。

このような世界に対する主観的理解は、そのように理解する社会に適応するような行動傾向を生むだろう。つまり、たとえば、他者を助けるような行動はこの世界ではむしろノーマルでなく、そのように自分が行動することも行動もノーマルでない、だからそのように行動すべきでない、だから助けないという行動傾向につながるということである。

世界観・人間観・自己観について、その社会では、その人々はそのことをどの程度の確率で行うのか 0% から 100% の尺度を提示して考える確率にマークさせた。結果は「今 20 歳が 30 年後ホームレス」だと思ふ悲観的な確率は高くはないが、「社会の安全」や、「普通の日本人が幸せ」というような安心感は高くはない。つまり大学生の世界観は「まじめにやっていたら幸せになれる」というほど楽観的なものではない。また、人間観は「おばあさんに席を譲る人」や、「拾った財布を届ける人」が過半数など人々に対する信頼感は低くはないが、「いじめを止める」人は多くないと評定するようにそれほど優しくはないという傾向があった。そして、自己観は「自分の夢かなう」は 40% 以下であり、将来家族を持ったり子を持ったりは半数であり、自己の将来の認知は暗い傾向がある。

このような世界観・人間観・自己観から生み出される行動や生き方は、あまり努力しない、してもしようがない、いじめは見て見ぬふりをしたほうが良いということになると思われる。

上記の世界観・人間観・自己観についての男女差はあまりないが、女性は男性に比べて「社会の人は間違えた釣を返す」、「いじめを止る」、「利己的でない」というようなポジティブな人間観と、自己観でも将来の幸せについてポジティブな傾向が一部分ではあるが見られた。

幸福感に関する質問項目のうち「幸せだと思う」について、大多数が「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」であった。古市憲寿が『絶望の国の幸福な若者たち』(2011) で述べるように、彼らは大人世代が考えるようには主観的に不遇ではなく、「幸せ」だと感じているのではないだろうか。IT 機器・環境の進化、コンビニなどの利便性の向上がある一方、「就職困難」、「世代間格差」、「デフレ」というような客観的にはネガティブなことの多い社会状況

の中でも若者は「幸せ」と感じるのである。つまり客観的状況＝主観的状況ではないということである。

本研究の目的の一つは対象者の「適応」について「幸福感」を基に検討することである。そして「幸福感」は、情緒性のような性格、物質主義や精神主義のような価値観といった個人の属性ではなく、世界観・人間観・自己観のような自分の生きる環境の主観的理解に強く影響されるという仮説を検証した。上記の「幸せだと思う」という直接的な問いでは幸せだという方向に対象者が偏るので幸福感に関わる7項目を基に合成変数を算出しこれを基準に分析した。結果は「将来に夢希望」「互いに助けあう」「自由のびのび」「格差ない」「努力むくわれる」「チャンスある」「正しいこと守られる」など、幸福感が強い群は弱い群より有意に世界観や人間観がポジティブな項目が多い。

幸福についてどのようなことが重要かという幸福感についての価値観を項目別に見たところ、「愛する人がいる」、「人から愛される」など愛に関すること、「周りの人とうまく・・・」「周りの人から好かれる」など対人関係が重要である。自己に関わることは対人的な事柄ほどは重要でないようだが、「前向き」「自分に自信」などは重要とされる。一方、「人より優れる」「注目」「尊敬」「達成」など優越や達成については幸福にとって重要ではないとされる。このことはMarkus&Kitayama（1991）の言う相互協調的自己観につながると言えよう。つまり自己というものが他者との重なりの中で定義されるということと同様に、幸福も自己内で完結するものではなく、他者との間に横たわることなのである。

幸福についてどのようなことが重要かという幸福感についての価値観の項目を因子分析したところ、「愛」「優越」「興奮」「周囲」「前向き」「正義」の6因子となった。

この6因子を幸福感の強弱2群で比べると、幸福感が強い群が達成、前向き、尊敬などの「前向き」の因子、愛される、愛する人などの「愛」の因子で有意に、興奮の因子で有意な傾向がありポジティブな態度であった。また、6因子で幸福感の強弱の判別分析を行うと、分類率は高くない。あえて述べると、幸福には前向きな態度が重要と思うほうが幸福感を持ちやすいという結果となった。

本研究では幸福感を従属変数とした分析を行ってきたが、本研究は「大学生の」適応ということがテーマなので、大学生の大学における適応を従属変数とした分析も行った。まず、大学適応全般を反映していると思われる「大学生活に満足している」の項目に対する回答は約70%は「あてはまる」、「どちらかというにあてはまる」であり、満足度は高かった。このことは前述の幸福度の高さにもつながることであり、現代の若者はネガティブな状況の中でも主観的には適応観を持つことが多いと言えよう。この大学満足度の4件法の中央で大学満足群と不

満群に分類し、この2群によって世界観・人間観の各項目の平均値を比べたところ、「正しいことが守られる」、「互いに助け合う」、「格差ない・・・」、「自由のびのび・・・」、「将来に夢希望」、「チャンスある」などの社会観に有意な差があり、大学生生活満足群は不満群に比べて世界観がポジティブである。同様に大学生生活満足・不満と世界観・人間観・自己観の主観的確率の関係をみると、「夢かなう」、「自分は30年後豊か」、「自分は20年後親」、「自分は20年後幸せ」といった自己観について大学生生活満足がポジティブであるが、世界観・人間観についても「利己的でない」、「いじめ止める」などについてポジティブである。

大学生生活満足・不満の2群を世界観・人間観・自己観の項目で判別した結果、「自分は20年後に幸せ」という自己観の係数が大きい、「正しいこと守られる社会」、「互いに助け合う社会」、「物質的に豊かな社会」(－)という世界観も大学生生活満足感を説明する。つまり、大学における適応感も世界観でかなり説明できるものである。

以上のように、大学生の世界観は、自分の生きる世界が、可能性はあるが人に温かくない、まじめにやっていたら幸せになれるというほど楽観的なものではないと社会と認識している。また自己の将来はあまり明るくないという自己観である。このような世界に対する主観的理解は、そのように理解する社会に適応するような行動傾向を生むだろう。つまり、あまり助け合わず、必要以上には努力はせずということが、このように認識された世界では適応的な行動と判断されることになり、そのようにふるまうだろう。このようにして、孤独、無気力という問題傾向が生じていくのではないか。

このようなことは対象者の適応のメジャーである主観的な幸福感にも反映される。結果によると幸福感が強い群は世界観や人間観がポジティブである。また、幸福感につながる価値観が優越や達成など自己内で完結するものでなく、他との関係と関係が深いという結果も同様のことが言える。つまり、世界や人々をどう見るかという世界観や人間観は幸福感と関係が深く、それに基づいて他者との関係がどうかということが幸福感につながるのである。

もう一つの適応のメジャーである大学生生活満足も低くない。そして、大学生生活満足感も世界観と関係があり、世界観・人間観でかなり説明できるものである。

以上のことから、大学生における適応の問題は性格や価値観のような個人特性だけではなく、世界観・人間観・自己観のような、自分の生きる世界をどう見るのかという認識に影響されるという仮説は検証されたと考える。

文献

- 堀内勝夫, 中里至正, 松井 洋, 中村 真, 永房典之, 鈴木公啓 (2005). 恥意識の構造 日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集 97-98.
- 堀内勝夫・松井 洋・中村 真・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (1) 恥意識の構造. 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 354-355.
- 古市憲寿 (2011) 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 松井 洋 (1991) 青年期における愛他行動の発達とその規定因, 川村学園女子大学研究紀要 第 2 巻 181-193.
- 松井 洋 (1992) 大学生の学校適応と授業態度に関する研究, 川村学園女子大学研究紀要, 第 3 巻 第 2 号, 147-165.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之 (1995) 愛他性の構造に関する国際 比較研究 日本心理学会第 59 回大会発表論文集, 173.
- 松井 洋 (1997) 愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として— 川村学園女子大学研究紀要, 第 8 巻 第 1 号, 147-165.
- 松井 洋 (1998) 中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの学生・高校生を対象として—, 川村学園女子大学研究紀要 第 8 巻 第 1 号, 147-165.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之 (1998) 愛他性の構造に関する国際比較研究, 社会心理学研究, 第 13 巻, 2 号, 133-142.
- 松井 洋 (1998) 中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究一, *Health Sciences*, vol. 14, no. 2, 45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋 (1998) 愛他性に関する国際比較研究—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—, 川村学園女子大学研究紀要第 9 巻 第 1 号, 175-186.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之 (1998) 親子間の心理的距離と愛他性に関する国際比較, 日本教育心理学会発表論文集 (40), 197.
- 松井 洋 (1999) 日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究一, 川村学園女子大学研究紀要第 10 巻 (1) 131-153.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之 (2000) 中学生の親子の心理的距離, 日本心理学会第 64 回大会論文集, 190.
- 松井 洋 (2000) 日本の若者のどこが変なのか: 中学生・高校生の国際比較から, 川村学園女子大学研究紀要, 第 11 巻, 第 1 号, 101-114.
- 松井 洋 (2001) 日本の中学生の親子関係, 川村学園女子大学研究紀要, 第 12 巻, 第 1 号, 171-180.
- 松井 洋 (2002) 日本の中学生の親子関係と非行的態度, 川村学園女子大学研究紀要, 第 13 巻, 第 1 号, 105-119.
- 松井 洋 (2003) 親子関係と子どもの道徳性: 日本, アメリカ, トルコの中高生の比較, 川村学園女子大学研究紀要, 第 14 巻, 第 1 号, 85-99.
- 松井 洋 (2004) 社会的迷惑行為に関する研究, 川村学園女子大学研究紀要, 第 15 巻, 第 1 号, 55-68.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之 (2004) 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (4)—社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感— 日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集 522.
- 松井 洋 (2004) 少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性 児童心理 58(2), 160-165, 金

子書房.

- 松井 洋 (2004) 非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究, 社会安全研究財団助成事業実績報告書, 代表松井洋 21 頁.
- 松井 洋・中里至正・片山美由紀 (2005) 非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究, 季刊社会安全 (57) 18-25.
- 松井 洋 (2008) 現代若者の価値観 丸山久美子編 21世紀の心の処方学 第3部17, アートアンドプレーン.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之 (2005) 非行的態度の抑制要因に関する研究川村学園女子大学研究紀要, 第16巻, 第1号, 27-44.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓 (2005) 恥意識と道徳意識の関係日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集 101-102.
- 松井 洋 (2006) 手のかからない子を望む親, 児童心理 60(1) 18-23.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之 (2006) 「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども— 川村学園女子大学研究紀要第17巻第1, 51-70.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫 (2007) 恥意識に関する文化比較および世代間比較, 川村学園女子大学研究紀要 第18巻, 第1号.
- 松井 洋 (2007) 親と子の双方から見た親子関係 日本発達心理学会第8回大会発表論文集ラウンドテーブル.
- 松井 洋・六角絵里子・中村 真・堀内勝夫・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (3) 非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 358-359.
- 松井 洋・中村 真・田中裕 (2010) 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要第21巻1号, 121-133.
- 松井 洋・田中裕・中村 真 (2011) 大学生の大学適応に関する研究 平成22年度川村学園女子大学教育研究奨励報告書 59頁.
- 松井 洋・田中裕・中村 真 (2012) 大学生の大学適応に関する研究Ⅲ 川村学園女子大学研究紀要第23巻1号, 117-129.
- 松井 洋 (2013) 若者の世界観と適応. 川村学園女子大学研究紀要第24巻1号, 107-129.
- 永房典之・中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫 (2004) 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (2)—非行的態度との関係—日本社会心理学会第45回大会発表論文集 524.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之 (2004) 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (3)—親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集 520.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫他 (2005) 親子の心理的距離と恥意識の関係, 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集 99-100.
- 中村 真・松井洋・堀内勝夫・石井隆之他 (2006) 親子関係と青少年の非行的態度: 沖縄県の中高校生に対する実態調査から, 川村学園女子大学研究紀要 第17巻, 第1号, 101-109.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 (2007) 親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ, 川村学園女子大学研究紀要 第18巻, 第1号, 123-140.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (2)—親子関係と恥意識の形成— 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 356-357.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫他 (2009) 非行的態度の抑制因に関する研究 (2), 川村学園女子大学研究

- 紀要第20巻, 第1号, 77-89.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫他(2010) 親子関係と青少年の非行的態度(4) 親子関係, 恥意識, 非行的態度の関連性, 川村学園女子大学研究紀要 第21巻, 第1号, 8167-177.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕(2011) 大学生の大学適応に関する研究Ⅱ—入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連—川村学園女子大学研究紀要 第22巻, 第1号, 85-94.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久(1992) 非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として, (財)日工組調査研究財団.
- 中里至正・松井洋・小林裕(1999) 異質な日本の若者たち—非行的態度との関連で, 犯罪心理学研究 37(特別号) 216-219.
- 中里至正・松井洋他(2003) 非行抑制要因に関する社会心理学的研究, 平成15-16年度科学研究費補助金 基盤研究(c)(2) 研究成果報告書 研究課題番号 1384003 代表中里至正.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol. 27, pp562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes -A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths-. *International Journal of Psychology*, vol. 28, pp48.
- 中里至正・松井 洋(編著)(1997) 異質な日本の若者たち, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋(1999) 日本の若者の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋(2003) 日本の親の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋(2007) 「心のプレーキ」としての恥意識 - 問題ある日本の若者たち (共編著) プレーン出版.
- 島田一男・松井洋他(1994) 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成5年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男.
- 島田一男・松井洋他(1995) 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成6年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男.
- 山岸俊男(2008) 日本の「安心」はなぜ消えたのか 社会心理学から見た現代日本の問題点 集英社インターナショナル.

附. 調査票

1. あなたが暮らしている社会について「こうあってほしい」とか「こうあるべきだ」という気持ちがあると思います。下の1. から9. のことは社会のあるべき姿としてどのくらい重要だと思いますか。

1. きわめて重要 から 4. 全く重要でない までのどれか一つに○をつけてください。

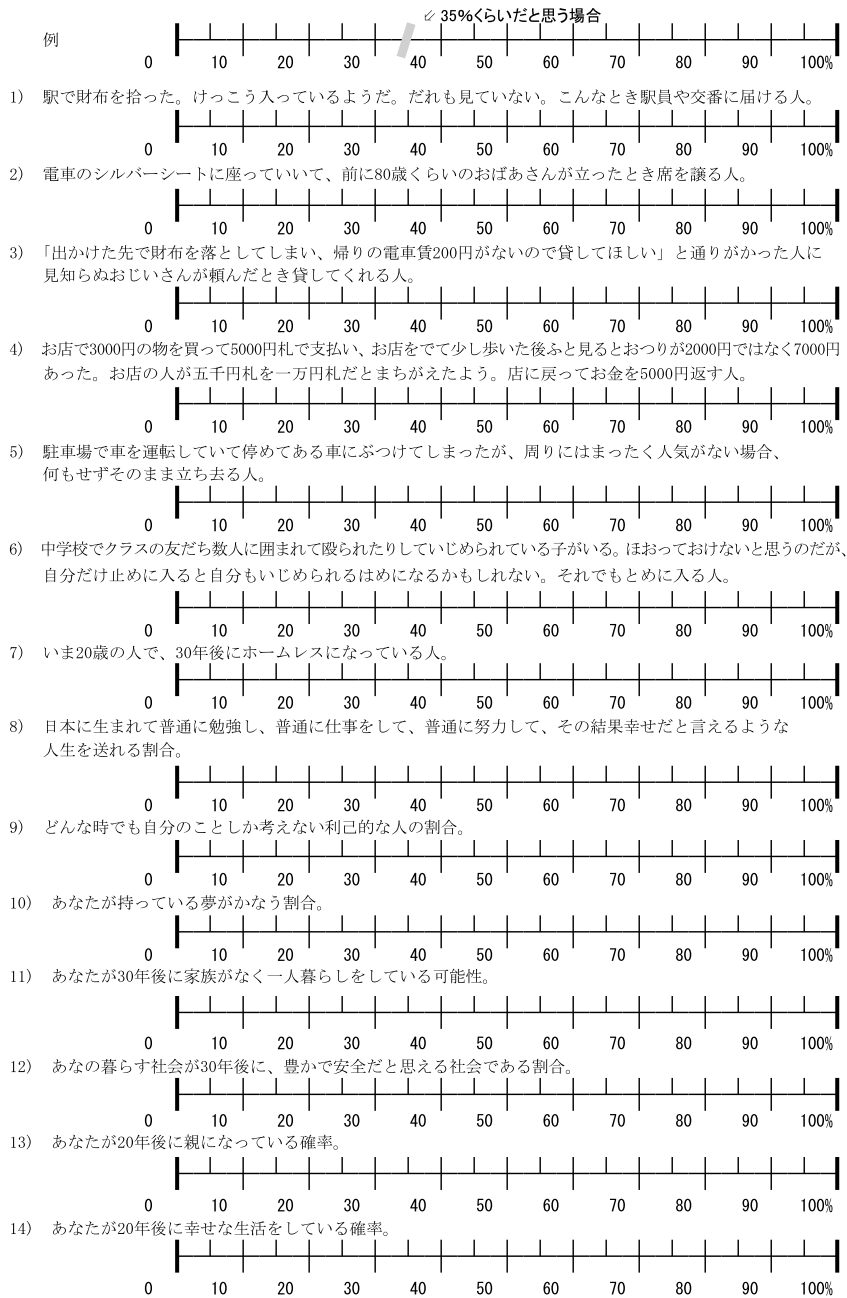
	きわめて重要	重要	どちらかという 重要	どちらかという 重要でない	重要でない	全く重要でない
1) 将来に希望や夢を持てる社会	1	2	3	4	5	6
2) お互いに助け合う社会	1	2	3	4	5	6
3) 自由でのびのびとした社会	1	2	3	4	5	6
4) 格差がない平等で公平な社会	1	2	3	4	5	6
5) 弱いものでも生きていきやすい社会	1	2	3	4	5	6
6) 努力した人が報われる社会	1	2	3	4	5	6
7) いろいろなチャンスがある社会	1	2	3	4	5	6
8) 正しいことが守られる社会	1	2	3	4	5	6
9) 刺激的なことが多い社会	1	2	3	4	5	6
10) 物質的に豊かな社会	1	2	3	4	5	6
11) 安定した社会	1	2	3	4	5	6

2. あなたが暮らしている社会の現状は、下の1. から9. のことについてどのくらいあてはまると思いますか。

1. 全くあてはまる から 6. 全くあてはまらないまでのどれか一つに○をつけてください。

	全くあてはまる	あてはまる	どちらかという あてはまる	どちらかという あてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない
1) 将来に希望や夢を持てる社会	1	2	3	4	5	6
2) お互いに助け合う社会	1	2	3	4	5	6
3) 自由でのびのびとした社会	1	2	3	4	5	6
4) 格差がない平等で公平な社会	1	2	3	4	5	6
5) 弱いものでも生きていきやすい社会	1	2	3	4	5	6
6) 努力した人が報われる社会	1	2	3	4	5	6
7) いろいろなチャンスがある社会	1	2	3	4	5	6
8) 正しいことが守られる社会	1	2	3	4	5	6
9) 刺激的なことが多い社会	1	2	3	4	5	6
10) 物質的に豊かな社会	1	2	3	4	5	6
11) 安定した社会	1	2	3	4	5	6

3. あなたが暮らしている社会の人々は、次のような場面でどのように行動するでしょうか。また次のようなことはどのくらいの割合で起こるでしょうか。その割合は100%から0%のうちどの位だと思つか、例のように線でマークして答えてください。



大学生の世界観・人間観・自己観と幸福感

4. あなた自身について下のことはどのくらい当てはまりますか

注. できるだけ縮小して添付してください

1. あてはまる から 4. あてはまらないまでのどれか一つに○をつけてください。

	あてはまる		あてはまる	どちらかというど	あてはまらない	どちらかというど		あてはまらない
1) 幸福だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
2) 毎日の生活に満足している	1	-	2	-	3	-	4	
3) 人との関係について満足している	1	-	2	-	3	-	4	
4) 毎日楽しい	1	-	2	-	3	-	4	
5) 落ち込んだりすることが多い	1	-	2	-	3	-	4	
6) 自分の将来に夢がある	1	-	2	-	3	-	4	
7) 何かをしようという意欲が足りない	1	-	2	-	3	-	4	
8) 人と接するのは気が重い	1	-	2	-	3	-	4	
9) 小さな幸せが大事だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
10) でしゃばらないようにしている	1	-	2	-	3	-	4	
11) 自由にのびのびと行動している	1	-	2	-	3	-	4	
12) 神や仏のようなものは大切だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
13) 近所の人と付き合いがある	1	-	2	-	3	-	4	
14) なまけたり努力しなかった人が困っていても助ける必要はない	1	-	2	-	3	-	4	
15) 正直言って自分のことがあまり好きではない	1	-	2	-	3	-	4	
16) 努力はいつか報われると思う	1	-	2	-	3	-	4	
17) 学校に行きたくないことがよくある	1	-	2	-	3	-	4	
18) 自分のこれからの人生は明るいと思う	1	-	2	-	3	-	4	
19) みんなから孤立するのは怖い	1	-	2	-	3	-	4	
20) 自分らしさが一番大事だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
21) 人どうしの絆はとても大切だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
22) 女(男に)に生まれてよかったと思う	1	-	2	-	3	-	4	
23) 結婚はしたほうが良いと思う	1	-	2	-	3	-	4	
24) 人生には異性のパートナーが必要だと思う	1	-	2	-	3	-	4	
25) しっかり自己主張するほうだ	1	-	2	-	3	-	4	
26) ほかに人にどう思われても自分は自分だ	1	-	2	-	3	-	4	
27) 人と競争するのは苦手だ	1	-	2	-	3	-	4	
28) 他の人や社会のために役に立ちたいと思う	1	-	2	-	3	-	4	
29) 大学の授業は楽しい	1	-	2	-	3	-	4	
30) 授業の内容が難しいと思う	1	-	2	-	3	-	4	
31) だいたいの授業はわかりやすい	1	-	2	-	3	-	4	
32) 大学生活に満足している	1	-	2	-	3	-	4	
33) 大学の勉強に満足している	1	-	2	-	3	-	4	
34) 大学の教員はいろいろと相談にのってくれる	1	-	2	-	3	-	4	
35) 大学の事務の人たちは親切だと思う	1	-	2	-	3	-	4	

5. あなたにとって幸福とはどのようなことでしょうか。たとえば下のことはあなたの幸福にとってどのくらい重要なことでしょうか。

1. きわめて重要 から 6. 全く重要でないまでのどれか一つに○をつけてください。

	き わ め て 重 要	1	2	3	ど ち ら か と い う と 重 要	4	ど ち ら か と い う と 重 要 で な い	5	重 要 で な い	6	全 く 重 要 で な い
1) 経済的に豊かなこと	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
2) 周りの人たちとうまくいっていること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
3) 困難な目標を達成すること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
4) 刺激的なことが多いこと	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
5) 落ち着いた気分でいられること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
6) 何事も人並みであること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
7) 人から尊敬されること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
8) 家族と一緒に暮らすこと	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
9) 愛する人がいること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
10) 人から愛されること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
11) 自分自身に自信が持てること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
12) 人から注目されること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
13) 正しいことをしていると思えること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
14) 自分が社会の役にたっていると思えること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
15) 気分がうきうきするようなことがあること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
16) 自分が人と比べて優れていると思えること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
17) 自分が周りの人たちから好かれていること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
18) ドキドキわくわくするような気分になること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
19) 自分が周りの人たちから好かれていること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
20) 自然であること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6
21) 前向きであること	1	-	2	-	3	-	4	-	5	-	6